
ラマ・フルル 恋詩

ごん太

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ラマ・フルル 恋詩

【Nコード】

N1451E

【作者名】

ごん太

【あらすじ】

ルーゼリカ王国、王女ルーナスと、そのお付きバートとのたわいもない一日。ゆるーい恋愛をご希望の方、どうぞ。恋愛じゃない可能性が高いです。これは、あいば様の立てた企画参加用のプレゼン作品です

あなたは私を見ていない

『手を伸ばせば届くのに』

私の声はあなたに届かない

『うっん、言葉にしていけないだけ』

いつそ捨ててしまいたい

『捨てる勇気もないくせに』

目を閉じて

『耳をすまして』

聞こえる

『あなたの……』

「バート、いないの？ また置いてけぼり？」

私の声は、目眩がする程長い廊下に敷かれた、赤い絨毯じゅうたんに吸い込まれ掻き消える。

溜め息をつくくと、耳にわずらわしく掛かる、緩やかにウェーブする金の糸を手櫛で分けた。

「ああ、もう！ お父様つたらどこ行つたのかしら！ 私なんかが議会に出てどうなるってのよ！」

着慣れない純白のドレス、履き慣れない白のヒール、襟元にはきらびやかなネックレス、手首には、これまた豪華なブレスレット。

“女の子”みたいな格好、私には似合わない。ううん、これは“お姫様”ね。

私はスカート裾をたくしあげると、第三会議場へ駆けた。

走りながら、全長二メートル程の大きなガラス窓から、外の景色を覗く。

薄い雲が青空に掛かる良い天気。こんな日はピクニックなんて、どうかな。

その前に会議。勘弁してよ、ホント！

ようやく辿り着いた、会議場前の廊下に、少年が立っていた。銀髪が美しいスーツ姿の少年、名前はバート。私のお付き。

な・ん・だ・け・ど！

「バート！ 私置いて、先に行かないでよ、バカ！ なんであなたは、いつも私を置いてくわけ！？ 私のお付きでしょ！」

その怒鳴り声に、バートは慌てた様子で私の口を塞ぎ、人差し指を立てて『しーっ』のポーズ。

私は子供か！ ……今年十五だから、まだまだ子供？ バートも同じ年よ。幼なじみなんだから。

口を塞ぐバートの手を払うと、乱れた髪とドレスを手早く直し、黒塗りの大きな扉を押し開けた。

会議場内には、各国の要人が顔を揃え、あーだのこーだの話し合っている。

私が入って来た事に気付いたお偉い様方は、口を閉じると席を立ち、私に向けて頭を下げた。

「ルーナス王女、サーレイン王はいかががされた？」

白髪混じりのダンディな男性が、優しい口調で問い掛けて来た。

そう。私はこの国『ルーゼリカ』を治めるサーレイン王の一人娘つまり王女様なのだ。でも、普段はドレスなんか着ないし、こんなキンキラも身に付けない。肌が荒れてかゆいのよ！

「お父様？ 知らないわよ！ また城下に下りたんでしょ！」

父のサーレインはしょっちゅう城を抜け出す、困った人だ。

そして、父が不在の際、会議に引つ張られるのが私というわけ。適当に挨拶を終え、面白くもなんともない議題をやつつける。それが終わる頃には、私の頭はパンク状態。針で刺したら空気音とともに、全身がしおしおになりそう。

お偉い様方が頭を下げて出て行くのを見送ると、肘掛け椅子の背もたれに、どっかり体重を預け、深くふかーく溜め息を吐く。

「姫、お疲れ様です」

会議場に入って来たのはバート。いつものようにニコニコと、明る過ぎて直視出来ない笑みを浮かべてくれる。

「ねえ、バート。二人の時は昔みたいに、ルナって呼んでよ」

返って来るのは、お決まりの一言。

「私は姫の単なるお付き。そのような者が、」

「気安い呼び方をする事は、不敬罪に辺り　ああ、もう！　聞き飽きたわよ！　バカ、バート！」

椅子から跳び下りると、腰に手を当て、眉を吊り上げる。

私の膨れっ面に、バートはある事かくすくす笑ってくれている。

「ちよつと！　不敬罪なんじゃないの、それ!?!」

「いえいえ。怒った顔も可愛いらしい」

「……あっそ」

いつものお世辞を私は冷たくあしらうと、会議場をさっさと出て行く事にした。どちらにしても、もう用はないわけだし。

「あ、姫」

「あによ!?!」

不機嫌全開でバートを睨み付けたが、まるで効果無し。

さすがに不機嫌な態度も疲れて来た私は、機嫌をチェンジ。なあ、簡単に出来たら、カウンセラーなんていらんよ。

「今日は良い天気ですし、外で紅茶でもいかがですか？」

天気の良い日は、いつもテラスでティータイム。バートの趣味らしいけど。正直飽きた。

「ティータイムはいいけどさあ、たまには違う紅茶にしてくれるかなあ？ いつもキニー・ファムって、もういい加減にして欲しいんだけど？」

キニー・ファムはルーゼリカ産のハーブで、それを使った紅茶は、香りも味も強過ぎず飲みやすい。

飲みやすいのはわかってるけど、なんで毎回なのよ？

「うーん。キニーしかないんですよ。ミルク入りならどうですか？」

「……どれだけキニー好きなの」

二階にあるテラスには、白い木製丸テーブルが置かれ、その周りにはプランターが敷き詰められている。プランター内は、キニー・ファムが青々と茂っている。

どこもかしこも“それ”ばかり。

この国はキニー・ファムで出来てるんですか？ いい加減見飽きたし、名前なんか、来世に持ち越せるくらい聞き飽きたわよ。

「姫、お待ちどうさまです」

「待ってる間も辺りからはキニーの香りがしてたのよ？ もう飲まなくてもお腹一杯よ」

「まあまあ、そう言わず」

ティーポットをゆっくり傾けて、ティーカップに流れたのは、淡い赤。キニー・ファムの葉は熱を通すと赤く変色し、その色素成分が湯に溶け込み、淡く染めるのだ。

別名『ラマ・フルル』

古代ルーゼリカ語で、淡い想いという意味らしい。

体の奥が火照り、内側が淡い赤に染まる頃、仕草、言葉からその想いが溶け出す。

ロマンス。鼻つまみたくなるわね。

「バート。ラマ・フルルって詩知ってる？」

「もちろん」

当然よね。ルーゼリカに語り継がれる恋詩だもの。

胸に抱いた、淡い気持ちを言葉に出来ず、ただ、想う人の声を聞く。

確かそんな歌よね。

「姫は知ってますか？ ラマ・フルルのおまじない」

「おまじない？」

初耳。恋詩までは知ってたけど、まさかおまじないまであるなんて、万能な紅茶だ事で。

「陽の光の下、淡い色を想う人に傾けて、ニッコリ微笑みながら三口付け、また微笑む」

陽の光の下 天気の良いよね。

淡い色 キニーの事かしら。

微笑みながら三口付け、また微笑む。

……バートがいつもしてる飲み方ね。変わってると思ったら、おまじないだったのねえ。

……………？

「想い人に傾けるって、好きな人と一緒に飲むって事？」

「ご名答」

向かいに座るバートは、いつものように微笑むと、三口付けてカップをコースターに置き、私に微笑み掛けて来る。
それって、つまり？

「どういう意味？」

「ふふ。さあて、どういう意味でしょうね？」

バートの向ける笑顔は、青空に輝く太陽のように明るくて、とても直視出来なかった。

私を見ていてくれたの？

『うんと小さな頃から』

私の声、届いてた？

『あなたの声しか聞こえない』

目を閉じて、耳をすませば、あなたの声が聞こえて来る。

『まるで心が繋がっているように、君の声が聞こえて来る』

おまじない、何をお願いしているの？

『変わらない日々と、変わらない想い』

二人の想いは変わらない

いつまで経っても

出逢った、あの日のまま

終

(後書き)

冒頭の詩がラマ・フルルというわけですが、口ずさめる感じでしたか？ 「詩はメロディに乗せて歌えるもの」という私論から来ていますが、まあ、どちらでも良い。 作中に出て来た、キニー・ファムは作者が勝手に作ったものです。探してもありませんから。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1451e/>

ラマ・フルル 恋詩

2008年8月29日17時22分発行